

年間第29主日

福音朗読 マタイ 22・15-21

2023.10.22 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日は冒頭にも申し上げましたけれども、「世界宣教の日」になっています。それは、各地で集められた献金がバチカンでそれぞれの宣教地を援助するたまたに配分されます。日本も宣教地の中に入っていますので、バチカンから今でも、今日の「世界宣教の日」の世界中で集められた献金から援助を受けているという面がありますので、わたしたちがそれぞれ頂いているということも思い起こしながら、また各地のもっと援助を必要としている兄弟姉妹のために祈り、また出来ることをする、その思いも新たにしたいと思います。

さて、今日の福音では、ファリサイ派の人とヘロデ派の人——普段は仲の悪い二派なんですけども——イエス様のところにやって来て、「皇帝に税金を納めることは律法に適っているのか、適っていないのか」という問いをして来た、と。しかし、これを問うのは純粋に自分たちが律法に従って生きたい、その道をはっきりさせたいということではなくて、イエス様を困らせる、陥れるためなんだということを、マタイの福音書はあらかじめ読者に示しています。

皇帝の税金を納めることがどうして律法上の問題になるのか、ということにつきましては「聖書と典礼」の下のところ解説が書いてありますので参照していただくとして、結局そのことそのものはイエス様にとってはどうでもいいことなんだ、と結論することができるわけです。イエス様ご自身は税金を納めるための銀貨を持っていない。当時のローマ帝国がいくら発達したとしても、民衆のレベルにまで貨幣経済が浸透していて、みんながお金で税金を納める——ローマのコインで税金を納めるという時代ではないわけです。日本だって、古い時代の税は租庸調そようちょうだって習いましたね。布とかお米とか、あるいは労役とか、そういうようなものです。だから、コインそのものはその貨幣経済の恩恵を受けている上流階級の関心のものであって、「自分たちがそのネットワークの中に参加してるんだったら、どうぞそのための代金を払ったらいいでしょ」っていう、そういうことなんですけども、イエス様が言いたいのは、そのあとです。

「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」(マタイ 22・21)。「この際だから言わせてもらいますけどね、神のものは神に返しなさい」っていうのがイエス様の答えですけども、ではここで「神のもの」と言われているものは何でしょうか？ いろんな説明がありますが、わたしたちの信仰では、神様からわたしたちがいただいているものは一つもない、全てなんだ、という結論に達しますけれども、そのことはひとまず置いて、マタイの福音書の直接の文脈、このお話の中でイエス様が「神のもの」と言っているのは、マタイの福音書をずうっと最初から素直に読んでいけば、「それは律法なんだ」と言うことができるんじゃないかと思います。

イエス様は、「わたしは律法を完成するために来た」(マタイ 5・17)とおっしゃっているし、そしてイエス様の目から見れば、律法学者とか祭司長とか、神の指導者たちが律法を——律法というのは当時の宗教全体のことですけど——自分たちが力を維持するために使ってしまった、自分たちのために使ってしまった。それを神様に返しなさいっていうのがイエス様が指導者たちに訴えたいことだし、今日の福音で言うならば、人を陥れるために「神様の御心に適うことですか、適わないことですか」っていう質問を出してくる、律法そのものを自分たちの権力を維持し、そして邪魔者を排除するために用いようとしている、そういうことは止めてくださいっていうのが、「神のものは神に返しなさい」ということの文脈上の直接の意味なのではないかと考えることができます。

旧約聖書の最初の五つの書物——「創世記」、「出エジプト記」、「レビ記」、「民数記」、「申命記」——この五つの書は「律法の書」と言われています。しかしその中でわたしたちがイメージする十戒とか、こういう時にはこうしなさい、こういう行事ではこうしなさいっていういわゆる掟の部分は、その中のほんの一部であって——聖書を通読するときにはそういう掟の部分が出て来ると、わたしたちは退屈してしまうというか、難しいなあって感じますけども——その律法の書でありながら、律法がイスラエルの民に与えられるに至った経緯っていうのを天地創造の初めからずうっと述べていて、そして律法があって、今度、律法を与えられた民がどのように振る舞ったか、そしてどのようにその律法に対して間違いを犯したかっていう、そういう歴史がずうっとたくさん述べられていて、その真ん中に掟が列挙されていることになります。

それは、そもそも神様がどうして神の民に律法をお与えになったのか、その神様が律法をお与えになった意図、神様の御心から外れてそれをを用いることがないように、という、そういうイスラエルの人々の律法に対する大切な思いから、ずうっとそれが与えられるに至った経緯、そして与えられたあとの自分たちの先祖の失敗の中に掟そのものを合体させて伝えている。だから、そこから外れて、権力者が勝手に掟の条文

だけを自分に都合のいいように用いて——今日の福音のように人を陥れるためとか、自分の権威というものを確実にするために用いないように。歴史の中に掟を埋め込んでいるということは、それを大切に扱っているしるしだと言うことができるでしょう。

では、神様が神の民、イスラエルの民に律法をお与えになったその理由、そしてその目的はなんであるのか。それは、エジプトの国で長い間奴隷になっていた自分たちの先祖が、神様の憐れみによってその奴隷から脱出させていただいた。そして、自分たちが奴隷だった国のような国を二度と造ることがないように、二度とそこに戻らないように、弱い人、貧しい人たちが踏みにじられるような国を自分たちは造らない。そのためにどうしたらいいのかを神様が教えてくださった。これが神様が律法をお与えになった理由であり、このようなものとして、イスラエルの民は律法を受け取る、自分たちは律法を受け取らなくてはいけないんだってことを、ずうっと旧約聖書のモーセ五書は確認しているということになります。

ですから、そこから外れて勝手に自分の目的のために、利益のために、律法を——ましてやそれを人々に教え、民を導く立場の人が、そういうことを、自分のために、人を陥れるためとかに——律法を用いるのは止めてください。それがイエス様の第一番目に「神のものは神に返しなさい」と言いたいことなんではないかと思うんです。

当時のイスラエルの民だけではなくて、わたしたちの信仰においては、神様からいただかないものは何もない。だから全て——自分の命をはじめ、親しい人、また自分の人生の可能性、時間、持ち物、そして信仰そのものも——神様から頂いたっていう中において、「神のものは神に返しなさい」という呼び掛けは、当時の律法学者にだけでなく、イエス様を通してわたしたちにも呼び掛けられているというふうに受け取る必要があります。

でも、わたしたちがどうしてそれらを神様からいただいたか、理由は律法とは違って明らかにはされていない。「こういう目的のために神様はイスラエルの民に律法をお与えになりました」と聖書にはっきり書いてある。しかしわたしたちがいただいているものの、どうしてそれをいただいているのか、また何のためにいただいているのかは明らかにされていません。あるいは、むしろそれらの意味を与える理由や目的に関してさえも、神様はわたしたちの自由に委ねられたと言っていると思います。どのように今与えられているものの理由や目的を解釈するか、そこに意味を与えていくかということをも、神様はわたしたちにお委ねになったわけです。ですから、わたしたちが神様の御心に適わない行動をするときでも、急に体が動かなくなるとか、強制的に神様の御心に従うように考え方がコントロールされるということがないわけです。自由なんです。

わたしたちが恐怖に駆られてやりたくないことをやる、そのことを通してご自分の思いが実現するということを神様は望んでいらっしゃるわけではありません。しかし、絶えずイエス様を通して、「神のものは神に」、イエス様がご自分の全部を他の人のために渡されたように、そしてそのことを通して父である神様の御心に従って生きられたように、イエス様は「あなたのものもわたしと共にそこに意味を与え、わたしと共に用いる、その列に加わってくれないだろうか」と絶えず呼び掛け続けていらっしゃる。強制することなく、しかし、わたしたちが自由な決断においてその呼び掛けに応えるのを待っていらっしゃる。そして、呼び掛けに応えた人の影響が他の人にもだんだん広がっていくように待っていらっしゃるのではないかと思います。

それこそが——今日、世界宣教の日ですけども——ほんとの意味での宣教ということなんでしょう。宣教とは、ただ宣伝して、そして団体の人数を増やすということではない。むしろ、イエス様の呼び掛けを自分にされた呼び掛けとして受け取り、少しでも、イエス様が全部を他の人のために渡されたように、同じようには出来なくても他の人のために何かをしよう、自分のいただいたものをそのようにして神様にお返ししようとする人々の行為の影響が広がっていく、簡単に言えば、助け合う繋がりが広がっていくということ、それがほんとの意味での福音宣教であろうと思います。

今日、世界宣教の日にあたって、わたしたちが一人ひとりの「今頂いているものは何か」を振り返りながら、それに対してイエス様が「わたしと共にその意味を考え、わたしと共に用いて行って欲しい」という呼び掛けを改めて一人ひとりの心に受け取り直すことができますように。そして、この世界において、いろんな自分の都合のために何でも用いる、そういう人類ではありますけれども、またわたしたちでありますけど、しかしそこに留まることなく、呼び掛けに応じて互いに繋がっていく、その恵みを願いながら、このごミサを通して、一人ひとりがキリストの呼び掛けに応える思いを新たにできたら良いと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>